

## アレハンドロ・オルティスの神話学

加藤隆浩

キーワード： アレハンドロ・オルティス、神話、アダネバ、インカリ、ワロチリ

### Andean Mythology by Alejandro Ortiz

TAKAHIRO KATO

Keywords: *Alejandro Ortiz, myth, Adaneva, Inkarrí, Huarochiri*

アンデス世界は口頭伝承の宝庫である。アンデス地域とりわけペルーでは20世紀初頭から今日に至るまで各地で地域の説話が書籍などとして紹介され、郷土愛の深さを競うかのように矢継ぎ早に刊行されている。それがペルー独特の地域主義に根差すアイデンティティ、インディヘニスモと結びつき、地域における説話の掘り起こしと刊行という形で勢いづくこともある。

ペルーにおける説話ブームは、公教育とも緊密に結びつき、文化庁長官に就任したホセ・マリア・アルゲダスが、ペルー全土の教員に「説話コンクール」を呼びかけ、結果として全国から数万編以上の説話を蒐集した。そしてそれらを採集地に合わせ、海岸部・山間部・森林地域に分類し、地域差が浮き上がるような説話を選んで出版（ホセ・イスキエルドとの共編で、ペルー共和国・文部省の刊行物『ペルーの神話、伝説、昔話』1947）された。この試みは大成功をおさめ、説話への関心はますます高まった。

説話が決定的なブームになったのは1950年代であった。ペルーの海岸部と山間部で採話されたものが次々に刊行され、初めは雑誌の中のコラム的扱いだったが、すぐに説話だけで単行本が編まれるようになった。また、学術雑誌にも取り上げられるようになった。ブームを担ったのは、ホセ・マリア・アルゲダス、エフライン・モロテ・ベスト等で、国際学会や国際的な学術雑誌への投稿を活発に行い、説話がペルー人類学、民俗学研究の中心テーマの一つであると、国内外の研究者に印象づけた。

60年代、70年代に入ると説話に関する出版物はより洗練され、先住民言語とスペイン語の対

訳をつけるなど工夫が見られるようになる。ただ残念なことに、説話をどのように研究すればよいかの議論が欠けており、モロテ・ベストのような例外はあるにせよ、収集した説話をテーマごとに並べる程度の「研究」にとどまった。

そこで登場するのが、本発表の中心となるアンデス神話研究の開拓者アレハンドロ・オルティスである。彼はサン・マルコス大学でアルゲダスの薫陶を受け、アンデスの説話、とりわけインカリ神話に関心を持った。説話は文化や社会を理解するための要であると考えていたアルゲダスは、ペルーにその専門家がいなかったことを残念に思い、エキスパートを育成すべく、若きオルティスをフランスのレヴィ＝ストロースの元に送りこみ、神話の構造分析を学ばせた。アルゲダスのオルティスにかかる期待は大きかったと見え、「この説話はいずれ構造主義によって分析されるだろう」と自分の論考に予告めいた言葉を付記することさえあった。オルティスは、師の期待通り学位を修得し、その論文は『アダネバからインカリへ』として、ペルー初の本格的な神話分析の書となった。しかし、これは、オルティスにとっては、まだ半分の分析に過ぎなかった。そこで彼は7年後に同著の続編、姉妹本を刊行する。

ただ、この後発の書『ワロチリ、400年後』は、人目につかず、不当にも多くの読者をえないまま絶版となってしまった。しかし議論を先どりすれば『アダネバからインカリへ』とこの本と2冊を理解しなければ、われわれの最終目標である、オルティスの神話学を理解したことにはならない。

ではオルティスは、その著作にどのような問題意識を込めていたのか。彼自身の説明によれば、『ワロチリ、400年後』の目的は、以下の事柄を指摘することにあつたという。すなわち、オルティス自身が現在のワロチリ高地で蒐集した神話と、16世紀末に記録されたアビラ神父の著作（ワロチリ神話）とを比較し—この着想はもともとドゥヴィオールのものであった、とオルティスは告白している [Ortiz 1980:12]—400年の隔たりにもかかわらず、「ワロチリの高地の人々が神話を伝承してきたということを実証し、流動的な神話にはつきものの「変換」や「変化」を指摘しながら、同時にそこで取りあげられる神話群がある特定の構造に忠実であることを示す」 [Ortiz 1980:13] ことにあつたという。そしてオルティスは、そうした視座に立つと同時に、取り扱う神話に「ワロチリの」という限定条件をつけることで「神話の一貫性を呈示し、他の表象（たとえば宗教・呪術的表象や、、、儀礼）に対して神話の独自性の度合いを示し、「その作業を通して今日なおアンデス文化との評価を与えるその文化の働きや特徴を決定するのに寄与すること」が可能となるとする。

だとすれば、オルティスの『ワロチリ、400年後』の目論見は、時間を経た連続性を明らかにすることであり、それは前著『アダネバからインカリへ』で限定されたアンデスという空間性との相互関係の中で読み解くものということになる。

その様にして初めて「古くから根気よく議論されてきたアイデンティティの問題に行きつき」 [Ortiz 1980:14]、ワロチリ地方を代表させる形ではあるが「アンデス的なもの」の問題に帰着するというわけである。

#### 【主要参照文献】

- Ortiz, Rescaniere Alejandro, 1973, *De Adaneva a Inkari*. Retablo de Papel Ediciones, Lima.
- Ortiz, Rescaniere Alejandro, 1980, *Huarochiri, 400 años después*. Pontificia Universidad Católica del Perú, Lima.